

<原 著>

メタ認知が大学生の強迫傾向に及ぼす影響

岡田 まりあ\*, 宮崎 球一\*\*, 松野 航大\*, 根建 金男\*\*

要 約

強迫症 (obsessive-compulsive disorder: OCD) は、強迫観念と強迫行為を特徴とする精神疾患である。本研究では、頻度や強度、苦痛度や制御困難性において、OCD患者よりも軽度である健常者に見られる強迫的な特徴を「強迫傾向」と定義した。そして、Wells (1997) の自己調節実行機能モデルに基づいた仮説モデルを作成し、メタ認知が認知注意症候群 (cognitive attentional syndrome: CAS) を介して強迫傾向に及ぼす影響を検討することを目的とした。メタ認知レベルの変数としてメタ認知的信念と Thought-Action Fusion (TAF), CAS として心配, 思考抑制, 侵入思考への認知的対処の3つの変数を用いた。本研究の結果より、仮説モデルは概ね支持され、CAS によって強迫傾向に及ぼす影響力が異なることが示唆された。

**キーワード**: 強迫傾向, メタ認知, 自己調節実行機能モデル, 認知注意症候群

問 題

Diagnostic and Statistical Manual of Mental disorder-5 (American Psychiatric Association, 2013) において、OCD は強迫観念と強迫行為によって特徴づけられるとされている。またその中で、強迫観念は、「反復的、持続的な思考、衝動、または心像であり、侵入的で不適切なものとして体験されるもの」として定義され、強迫行為は、「反復行動や心の中の行為であり、その人は強迫観念に反応して、または厳密に適用しなくてはならない規則に従って、それを行うよう駆り立てられていると感じているもの」と定義されている。

強迫行為と強迫観念は、OCD 患者だけでなく、健常者にも認められている (Rachman & de Silva, 1978; Salkovskis & Harrison, 1984)。

例えば、鍵をかけたかどうか気になることや、物が綺麗に置かれていないことに対するこだわりは、個人差はあれど、日常的に我々誰しもが経験することである。Salzman (1973) は、健常者における強迫的な特徴は、生活における適応感が失われた時に増大して OCD の状態に至ることを主張し、日常生活に支障をきたさない程度の強迫的な行動から、OCD の強迫症状に至るまでをスペクトラムとして捉えた。また、OCD の発症の原因が、仕事上の挫折、過労、結婚上の問題、学業・進学などの生活ストレスであることが多いことも確認されている (Black, 1974; 成田, 1977)。つまり、OCD 患者と健常者の間には、頻度や強度の差異をもちながらも、同様の強迫的な特徴が存在することが示唆されている。李 (2004) は、こういった現状から、OCD の治療困難性と OCD 症状の連続性を考え、OCD 予防を見据えた強迫傾向の研究が非常に重要であることを述べている。

\* 早稲田大学大学院人間科学研究科

\*\* 早稲田大学人間科学学術院

OCDの研究としては、近年認知行動理論に基づいたものが盛んである。Salkovskis (1985) は、OCD患者にとっての問題は、侵入思考を重要だと考える認知的評価によって不安が生じ、中和行動をとることだと考え、侵入思考を重要視した。また、Wells (1997) も、OCDにおいて侵入思考に対する認知的評価に注目し、自己調整実行機能 (self-regulatory executive functions: S-REF) モデルを提唱した。S-REFモデルは、「メタシステム」「下位処理」「認知スタイル」の3つのユニットから構成されており、それぞれの相互作用から認知処理を説明したものである。メタシステムではメタ認知的信念やメタ認知的プランに関する処理が行われており、下位処理ユニットでは破局的な侵入思考や身体感覚に対する反応といった自動的処理が行われている (今井・今井, 2011)。認知スタイルでは、メタシステムと下位処理ユニットを繋ぎ自己に関する制御的処理を行っており、認知スタイルにおける内的現象に注目しすぎるために起こる「認知注意症候群 (cognitive attentional syndrome: CAS)」という状態が、特定の思考スタイルを活性化し、精神障害を引き起こすと考えられている。CASには、注意バイアスや、心配・反芻などの反復思考、さらに回避行動・思考抑制などの強迫傾向を悪化させる処理様式が含まれている (今井・今井, 2011)。S-REFモデルに基づいた介入であるメタ認知療法 (metacognitive therapy: MCT) では、このCASの状態から、思考から距離をとり内的出来事に気づいている「ディタッチト・マインドフルネス (detached mindfulness)」という状態を目指すことが重要とされる。

OCDに対するメタ認知的アプローチの有効性は、多くの実証研究で確認されている。Fisher & Wells (2008) は、4名のOCD患者に対して、MCTを用いた12回のセッションを行った。その結果、全ての患者に対して強迫症状の低下を確認することができた。また、Wells (1997) は

OCDのS-REFモデルで、メタ認知的信念としてThought-Action fusion (TAF) の概念を取り入れている。TAFはRachman (1993) が提案した概念であり、「ある行為について考えをもつことは、その行為を行うことと同じである」という思い込みである。Rachman, Thorndarson, Shafran, & Woody (1995) は、TAF得点が高くなると強迫傾向が強まることを確認している。加藤 (2012) は、TAFと思考抑制が強迫傾向に及ぼす影響を検討する研究を行い、強迫傾向の様式によってはTAFが思考抑制を媒介として強迫傾向に影響を与えることを確認した。そして、OCDおよび強迫傾向のモデルを洗練するため、思考抑制以外の認知的変数を用いて強迫傾向の研究を行っていく必要があることを示唆している。しかし、S-REFモデルに基づいて、メタ認知がCASを介してOCDや強迫傾向に及ぼす影響について検討を行った研究は少ない。

そこで本研究では、頻度や強度、苦痛度や制御困難性において、OCD患者よりも軽度である健常者に見られる強迫的な特徴を「強迫傾向」と定義した上で、S-REFモデルに基づいてメタ認知がCASを介して強迫傾向に与える影響を検討することを目的とした。分析1では、メタ認知がCASを介して強迫傾向へ与える影響を共分散構造分析によって検討する。メタ認知レベルとしてメタ認知的信念とTAFを測定し、CASとして心配、思考抑制、侵入思考への認知的対処を測定する。本研究の仮説は、以下のとおりである。

**仮説1.** メタ認知的信念は、心配、思考抑制、侵入思考への認知的対処の3つの認知的処理に有意な正の影響を及ぼし、CASを構成する3つの変数は、それぞれ強迫傾向に有意な正の影響を及ぼす。

**仮説2.** TAFは、心配、思考抑制、侵入思考への認知的対処の3つの認知的処理に有意な正の影響を及ぼし、このCASを構成する3つの変数はそれぞれ強迫傾向に有意な正の影響を及ぼす。

以上の仮説を図で示したものが Figure 1 である。メタ認知的信念や TAF が強迫傾向に影響を与えることは先行研究から確認されており (Clark, Purdon, & Wang, 2003; Rachman, Shafran, Mitchell, Trant, & Techman, 1996), その際に様々な認知変数が媒介となる可能性も示唆されている (加藤, 2012)。金築・金築・根建 (2010) は、心配とメタ認知の関連を明らかにしており, Rassin, Diepstraten, Merckelbach, & Muris (2001) は TAF と思考抑制に関連があることを示している。また, OCD や強迫傾向の認知的処理として, 心配・侵入思考への認知的対処・思考抑制はいずれも Wells (1997) の S-REF モデルの CAS に該当する認知バイアスとして挙げられる代表的なものであり, 多くの研究で強迫傾向との関係が示されている。心配は, 強迫観念と非常に類似した概念であるがあくまで区別するものと認識されている (杉浦, 2001) ため, 強迫傾向に影響を及ぼすと考えられる。思考抑制は, 強迫症状との関連が実証されており (Rachman, 1998), 侵入思考への認知的対処は, 下位因子によっては強迫症状と関連があることが確認されている (今井, 2006)。分析 2 では, 強迫傾向の各様式に対する CAS

の影響を検討するため, 心配, 思考抑制, 侵入思考への認知的対処という CAS を構成する 3 つの変数を説明変数とし, 強迫傾向を測定する J-PI32 の下位因子である「疑惑」「衝動」「確認」「汚染」「正確」の 5 つをそれぞれ目的変数として共分散構造分析を行う。

## 方法

### 調査対象者

2013 年 10 月下旬から 12 月上旬にかけて, 首都圏の私立大学生 205 名を対象とし, 質問紙調査を実施した。記入漏れがあった回答等は除き, 有効回答者数は 177 名 (男性: 78 名, 女性: 95 名, 不明: 4 名, 平均年齢: 20.09 歳 ( $SD=1.36$ ), 有効回答率: 86.3%) であった。

### 調査材料

1) 日本語版 Metacognitions Questionnaire-30 (MCQ-30; 山田・辻, 2007)

心配などの認知的活動に対する信念 (メタ認知的信念) を測定する尺度である。「認知への自信」「心配に関するポジティブな信念」「認知的自己意識」「統制不能な思考と危機に関するネガティブな信念」「思考統制の必要性に関する信念」

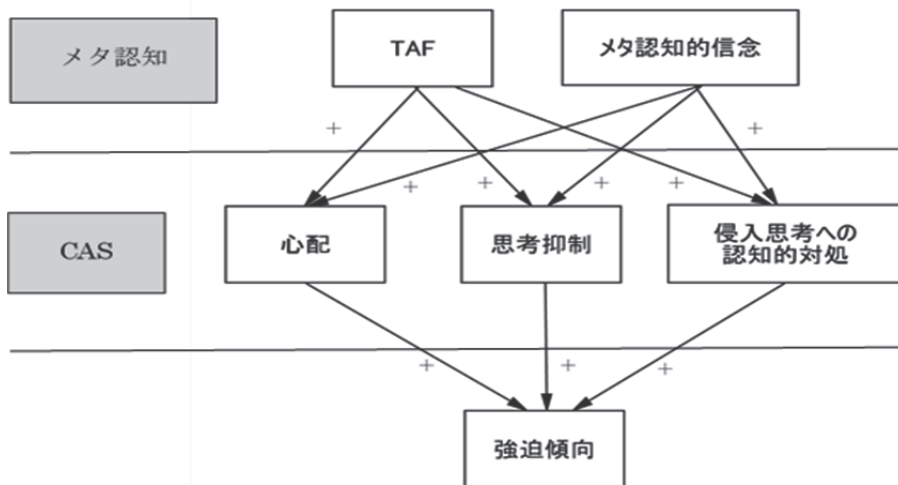


Figure 1 本研究における仮説モデル

の5因子に分かれており、30項目4件法で構成されている。

2) Thought-Action Fusion Scale 邦訳版 (TAFS; 鈴木・代田, 2004)

「ある行為について考えをもつことは、その行為を行うことと同じである」という思い込みである、TAFを測定する尺度である。OCDや強迫傾向においてTAFは重要なメタ認知的信念であるが、MCQ-30では測定できない因子であるため1つの変数として用いる。「道徳」「他人に何かが起こる見込み」「自分に何かが起こる見込み」の3因子に分かれており、16項目5件法で構成されている。

3) 日本語版 Penn State Worry Questionnaire (PSWQ; 本岡・松見・林, 2009)

心配をする頻度や強度を測定する尺度である。本尺度は単因子の尺度であり、16項目5件法で構成されている。

4) 思考抑制尺度 (松本, 2008)

自らの感情や思考を意図的に意識から追い払うという思考抑制を行う傾向を測定する尺度である。本尺度は単因子の尺度であり、15項目5件法で構成されている。

5) 侵入思考への認知的対処尺度 (今井, 2006)

侵入思考に対する主観的な評価を測定する尺度である。「確証的認知対処」「問題解決的認知対処」「反証的認知対処」のそれぞれ独立した3因子に分かれており、19項目4件法で構成されている。

6) 日本語短縮版 Padua Inventory (J-PI32; 鈴木, 2004)

強迫傾向による妨害感を測定する尺度である。「疑惑」「衝動」「確認」「汚染」「正確」の5因子に分かれており、32項目5件法で構成されている。

手続き

複数の大学教員に調査協力を依頼し、承諾が得られた教員が担当している授業の終了後に、教場にて一斉法で調査を実施した。調査用紙は

調査者が直接配布し、十分な回答時間をとった後、その場で回収した。その場で回収できなかった者に関しては、所定の鍵付きボックスに投函してもらうよう口頭で説明した。回答所要時間は15分程度であった。

倫理的配慮

調査の実施に際して、調査への協力は任意であること、本調査により収集された個人のデータが外部に漏れることは一切ないこと、万一気分が悪くなった場合は回答を中止すること、答えたくない項目には回答しなくても不利益は生じないことを口頭および文面で説明した。なお本研究は、早稲田大学人を対象とする研究に関する倫理審査委員会に承認を得て行った(申請番号: 2013-186)。

分析方法

本研究においては、SPSS Statistics version 22とAmos version 22を用いて、相関分析と共分散構造分析を行った。

結果

分析1: メタ認知がCASを介して強迫傾向に与える影響

仮説モデルを検証するために、まず予備的検討として、相関分析を行った。具体的には、MCQ-30、TAFS、PSWQ、侵入思考への認知的対処尺度、思考抑制尺度、J-PI32の得点を用いて相関分析を行った。まず、仮説モデルにおけるメタ認知レベルと認知レベルの関連性を確認するために、メタ認知的信念(MCQ-30合計得点)とCASを構成する3つの変数、さらにTAFとCASを構成する3つの変数の関連性についてまとめる。メタ認知的信念に関して、心配( $r=.59, p<.01$ )、思考抑制( $r=.53, p<.01$ )、侵入思考への認知的対処( $r=.32, p<.01$ )の間には、それぞれの有意な正の相関が示された。また、TAF(TAFS合計得点)に関して、心配( $r=.31, p<.01$ )、思考抑制( $r=.23, p<.01$ )、侵入思考への認知的対

処 ( $r=.29, p<.01$ )の間にもそれぞれ有意な正の相関が示された (Table 1)。

次に、認知レベルと強迫傾向の相関についてまとめる。心配に関して、強迫傾向 (J-PI32 合計得点) との間には有意な正の相関が示された ( $r=.54, p<.01$ )。思考抑制に関しても、強迫傾向との間には有意な正の相関が示された ( $r=.44, p<.01$ )。侵入思考への認知的対処に関しても、強迫傾向との間には有意な正の相関が示された ( $r=.42, p<.01$ )。この結果を Table 2 にまとめた。

以上の結果から、仮説モデルに含まれるメタ認知レベルと CAS レベルの変数間、および CAS レベルと強迫傾向の変数間それぞれにおいて正の相関があることが確認された。

次に、メタ認知が CAS を介して強迫傾向に及ぼす影響を検討するために、共分散構造分析を行った (Figure 2)。共分散構造分析の結果から、メタ認知的信念は、心配と思考抑制に正の影響を及ぼした (心配:  $\beta=.22, p<.01$ ; 思考抑制:  $\beta=.12, p<.001$ )。しかし、侵入思考への認知的対処への影響は有意でなかった。また TAF は心配 ( $\beta=.12, p<.01$ )、思考抑制 ( $\beta=.05, p<.01$ )、侵入思考への認知的対処 ( $\beta=.28, p<.05$ ) に正の影響を及ぼすことが示された。

心配と侵入思考への認知的対処は、強迫傾向へ有意な正の影響を与えることが確認された (心配と強迫傾向:  $\beta=.24, p<.05$ ; 侵入思考への認知的対処と強迫傾向:  $\beta=.47, p<.01$ )。しかし、思考抑制から強迫傾向への影響は有意でなかった。

**分析 2: 強迫傾向の各様式と CAS との関連性に関する検討**

強迫傾向の各様式に対する CAS の影響を検討するために、まず予備的検討として、相関分析を行った。心配に関して、強迫傾向の全ての下位因子得点の間には有意な正の相関が示された。思考抑制に関して、強迫傾向の全ての下位因子得点の間に有意な正の相関が示された。侵入思考への認知的対処に関して、強迫傾向の

全ての下位因子得点の間に有意な正の相関が示された。以上の結果を、Table 3 に示した。

予備的分析の結果から、心配、思考抑制、侵入思考への認知的対処という CAS を構成する 3 つの変数を独立変数、J-PI32 の下位因子を従属変数として共分散構造分析を行い、その結果を Figure 3 に示した。心配は、全ての強迫傾向に有意な正の影響を示した (疑惑:  $\beta=.43, p<.01$ ; 衝動:  $\beta=.32, p<.01$ ; 確認:  $\beta=.39, p<.05$ ; 汚染:  $\beta=.28, p<.01$ ; 正確:  $\beta=.24, p<.01$ )。

また、思考抑制は、疑惑にのみ有意な正の影響を示した ( $\beta=.14, p<.01$ )。侵入思考への認知的対処は、疑惑、確認、汚染に有意な正の影響を示した (疑惑:  $\beta=.21, p<.01$ ; 確認:  $\beta=.15, p<.01$ ; 汚染:  $\beta=.24, p<.01$ )。

## 考 察

本研究の目的は、Wells (1997) の考案した S-REF モデルに基づいた強迫傾向の仮説モデルを作成し検証することであった。分析 1 では、メタ認知が CAS を介して強迫傾向へ与える影響を共分散構造分析によって検討した。仮説モデルを検討する共分散構造分析の結果より、TAF は心配、思考抑制、侵入思考への認知的対処という 3 つの CAS を構成する変数に有意な影響を与え、そのうち心配と侵入思考への認知的対処が強迫傾向に有意な影響を与えることが確認された。つまり、「ある行為について考えをもつことは、その行為を行うことと同じである」という思い込みは、心配や思考抑制、侵入思考への認知的対処といった CAS を促進させることが示された。また、メタ認知的信念は心配と思考抑制に有意な影響を与え、そのうち心配が強迫傾向に有意な影響を与えることが確認された。つまり、メタ認知的信念を持っている時、心配や思考抑制を促進する可能性が示唆された。

分析 1 の結果から、仮説モデルにおいて心配と侵入思考への認知的対処の 2 つの CAS が強迫



Table 1 分析1における各変数間の相関係数(メタ認知—CAS) (N=177)

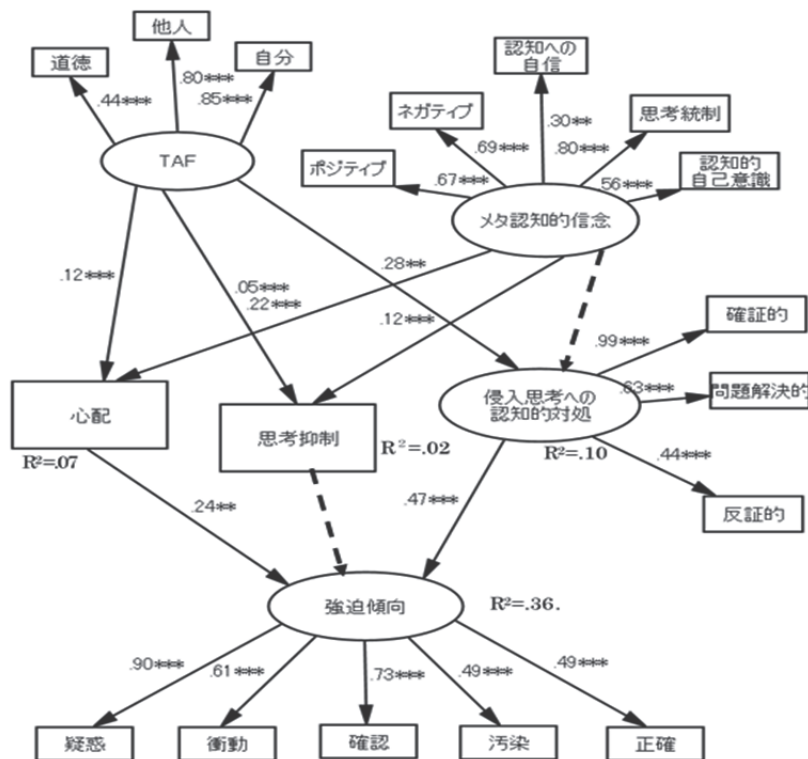
	心配	思考抑制	侵入思考への認知的対処
メタ認知的信念	.59**	.53**	.32**
TAF	.31**	.23**	.29**

\*\*  $p < .01$

Table 2 分析1における各変数間の相関係数(CAS—強迫傾向) (N=177)

	強迫傾向
心配	.54**
思考抑制	.44**
侵入思考への認知的対処	.42**

\*\*  $p < .01$



GFI=.865, AGFI=.812, RMSEA=.065

\*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$

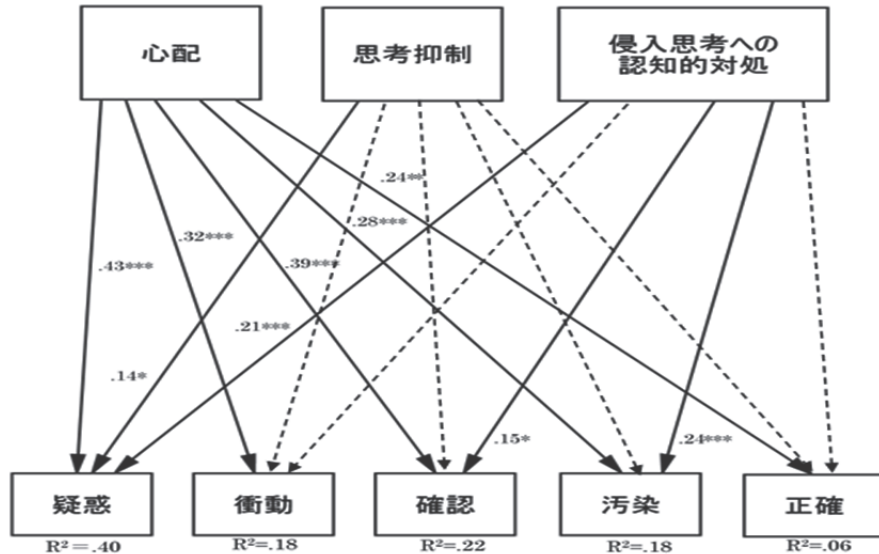
※有意でないパスは、破線で示した。

Figure 2 分析1における共分散構造分析の結果

Table 3 分析2における各変数間の相関係数(CAS—強迫傾向の各様式) (N=177)

	疑惑	衝動	確認	汚染	正確
心配	.58**	.41**	.44**	.36**	.24**
思考抑制	.50**	.35**	.34**	.30**	.19*
侵入思考への認知的対処	.45**	.23**	.32**	.37**	.19*

\*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$



GFI=.992, AGFI=.952, RMSEA=.000  
 \*\*\*  $p < .001$ , \*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$   
 ※有意でないパスは、破線とした。

Figure 3 分析 2 における共分散構造分析の結果

傾向に影響を与えることが確認された。さらに、TAF やメタ認知的信念が CAS に影響を与えていることも確認された。つまり、メタ認知を変容させることによって、CAS に影響を及ぼし、強迫傾向を減少させる可能性が示唆された。OCD においてメタ認知を変容させるための方法としては、曝露反応遂行法や言語的手法が挙げられる (Wells, 2009)。曝露反応遂行法は、強迫観念を中和するために行う儀式行為と、強迫観念の想起を同時に維持し続けることによって、自らの強迫的な思考に気づくことを目的とする技法である。言語的手法は、潜在的な強迫的思考を言語化した上で、反証を探すという技法で

ある。強迫傾向における OCD から健常者までのスペクトラムは前述の通り確認されているため、これらのメタ認知への介入によって、信念システムに矛盾が引き起こされ、強迫傾向が減少すると考えられる。

また、分析 2 では、強迫傾向の各様式と CAS との関連性に関する検討を行った。その結果、心配は強迫傾向の全ての様式に対して影響を与えることが確認され、同様に侵入思考への認知的対処は疑惑、確認、汚染の 3 つの様式に対して、さらに思考抑制は疑惑に対してのみ影響を与えることが確認された。このことから、CAS によって、強迫傾向の各様式に対して与える影

響が異なる可能性が示唆された。心配が強迫傾向の全ての様式に対して影響を与える結果となったのは、心配は制御困難の点において強迫観念と類似した概念とされているためではないかと考えられる。また加藤 (2012) は、日本語版モーズレイ強迫神経症質問紙 (MOCI) において「確認強迫」は思考抑制の影響を受けるが、「洗淨強迫」は思考抑制の影響を受けないことを確認している。本研究では、J-PI32 の「汚染」に関しては同様に影響が確認されなかったが、「確認」に関しても影響が確認されなかった。MOCI が強迫症状の有無しか測定できない尺度であるのに対し、J-PI32 は強迫傾向による日常生活の妨害の程度を測定できる尺度である。このような2つの尺度の特性の違いによって、異なる検証結果となった可能性が考えられる。以上の考察から、強迫傾向に関する研究において、今後使用する尺度を慎重に選ぶ必要があることも示唆された。

今後、本研究の結果や先行研究を参考に、様々な認知変数を試しながら OCD のメカニズムを解明していく必要があるだろう。また、本研究は質問紙調査によって行われたため、因果関係を実証するために実験研究による検討が必要である。

## 引用文献

- American Psychiatric Association (2013). *Diagnostic and Statistical Manual disorder: DSM-5*. Washington D.C.: American psychiatric Association (American Psychiatric Association 高橋 三郎・大野裕・染矢俊幸・神庭重信・尾崎 紀夫・三村将・村井俊哉 (訳) (2014). *DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル* 医学書院)
- Black, A. (1974). The natural history of obsessional neurosis. In H. R. Beech. (Ed.), *Obsessional states*. London: Methuen. 19-54.
- Clark, D. A., Purdon, C., & Wang, A. (2003). The Meta-Cognitive beliefs questionnaire: development of a measure of obsessional beliefs. *Behaviour Research and Therapy*, **41**, 655-669.
- Fisher, P., & Wells, A. (2008). Metacognitive therapy for obsessive-compulsive disorder: A case series. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, **39**, 117-132.
- 今井正司 (2006). 強迫傾向に特徴的な侵入思考への認知的対処ネットワーク 早稲田大学大学院人間科学研究科 2006 年度修士論文 (Imai, S. (2006). The Characteristic Network Structure of Cognitive strategy with Intrusive thought in non Clinical Obsessive Samples.)
- 今井正司・今井千鶴子 (2011). メタ認知療法 心身医学, **51**, 1098-1104.
- (Imai, S. & Imai, C. (2011). Metacognitive Therapy. *Japanese Society of Psychosomatic Medicine*, **51**, 1098-1104.)
- 金築優・金築智美・根建金男 (2010). 大学生の心配に対するメタ認知に焦点を当てた認知行動的介入の効果 感情心理学研究, **17**, 169-179.
- (Kanetsuki, M., Kanetsuki, T., & Nedate, K. (2010). The effectiveness of metacognitively focused cognitive behavioural intervention for university students with worry. *The Japanese Journal of Research on Emotions*, **17**, 169-179.)
- 加藤由佳 (2012). TAF (Thought-Action Fusion) と思考抑制が強迫傾向に及ぼす影響 弘前大学大学院教育学研究科学校教育専修臨床心理学分野 2011 年度修士論文



- (Kato, Y. (2012). Thought-Action Fusion and thought suppression in obsessive-compulsive symptoms.)
- 細羽竜也・内田信行・生和秀敏 (1992). 日本語版モーズレイ強迫神経症質問紙 (MOCI) の因子論的検討 *Memoirs of the Faculty of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University. IV, Science reports: Studies of fundamental and environmental sciences* (広島大学), **18**, 53-61
- 松本麻友子 (2008). 拡張版反応スタイル尺度の作成 パーソナリティ研究, **16**, 209-219.
- (Matsumoto, M. (2008). Development of Expanded Response Styles Questionnaire. *The Japanese Journal of Personality*, **16**, 209-219.)
- 本岡寛子・松見淳子・林敬子 (2009). 「心配」の自己評定式質問紙 -Penn State Worry Questionnaire (PSWQ) 日本版の信頼性と妥当性の検討 カウンセリング研究, **42**, 247-255.
- (Motooka, H., Matsumi, J. & Hayashi, K. (2009). The reliability and validity of a Japanese version of the Penn State Worry Questionnaire (PSWQ) : a self-report inventory of "worry". *The Japanese Journal of Counseling Science*, **42**, 247-255.)
- 成田善弘 (1977). 強迫症の臨床的研究 精神医学, **19**, 689-699.
- (Narita, Y. )
- Rachman, S. (1998). A cognitive theory of obsessions: Elaborations. *Behaviour Research and Therapy*, **36**, 385-401.
- Rachman, S., & de Silva, P. (1978). Abnormal and normal obsessions. *Behaviour Research and Therapy*, **16**, 233-248.
- Rachman, S., Shafran, R., Mitchell, D., Trant, J., & Techman, B. (1996). How to remain neutral: an experimental analysis of neutralization. *Behaviour Research and Therapy*, **34**, 889-898.
- Rachman, S., Thordarson, D. S., Shafran, R., & Woody, S. R. (1995). Perceived responsibility: Structure and significance. *Behaviour Research and Therapy*, **33**, 779-784.
- Rassin, E., Diepstraten, P., Merchelbach, H. & Muris, P. (2001). Thought-action fusion, and thought suppression in obsessive-compulsive disorder: *Behaviour Research and Therapy*, **39**, 1023-1032.
- 李曉茹 (2004). 強迫傾向に関する研究の展望 - 健常者に対する予防の視点から - 東京大学大学院教育学研究科紀要, **44**, 191-200.
- (Li, X. (2005). Review of the Obsessive-Compulsive tendency among non-clinical subjects: Focusing on protection)
- Salkovskis, P. M. & Harrison, J. (1984). Abnormal and normal obsessions- A replication. *Behaviour Research and Therapy*, **22**, 549-552.
- Salzman, L. (1973). *The obsessive personality: Origins, dynamics and therapy*. New York: Jason Anderson.
- (サルズマン, L. 笠原嘉・成田義弘 (訳) (1985). 強迫パーソナリティ みすず書房)
- 杉浦義典 (2001). 心配への認知的アプローチ - 能動性に注目して - 教育心理学研究, **49**, 240-252.
- (Sugiura, Y. (2001). Worry as Actively Controlled Thinking: A Cognitive Perspective. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **49**, 240-252.)
- 鈴木公啓 (2004). 日本語短縮版 Padua Inventory (J-PI32) の作成 精神科診断学, **15**, 15-24.
- (Suzuki, T.)

- 鈴木公啓・代田剛嗣 (2004). Thought-Shape Fusion Scale 邦訳版の作成 パーソナリティ研究, **13**, 91-101.  
(Suzuki, K. & Shirota, T. (2004). Development of the Japanese Version of the Thought-Shape Fusion Scale. *The Japanese Journal of Personality*, **13**, 91-101.)
- Wells, A. (1997). *Cognitive therapy of anxiety disorders: A practice manual and conceptual guide*. Chichester: Wiley.
- Wells, A. (2009). *Metacognitive Therapy for Anxiety and Depression*. The Guilford Press.  
(エイドリアン・ウエルズ 熊野宏昭・今井正司・境泉洋 (監訳) (2012). メタ認知療法—うつと不安の新しいケースフォーミュレーション 日本評論社)
- 山田尚子・辻平治郎 (2007). ネガティブな思考へのメタ認知及びそのコントロール方略 (2): Metacognitions Questionnaire 及び Thought control Questionnaire 日本語版の作成 日本心理学会第71回大会発表論文集, 960.  
(Yamada, N. & Tsuji, H.)

## Effects of Metacognition on Obsessive Compulsive Tendencies in University Students

Maria OKADA\*, Kyuichi MIYAZAKI\*\*, Kodai MATSUNO\*, and Kaneo NEDATE\*\*

\* Graduate School of Human Sciences, Waseda University

\*\* Faculty of Human Science, Waseda University

### Abstract

Obsessive-Compulsive Disorder (OCD) is a psychiatric disorder that consists of two major symptoms: obsession and compulsion. In this study, “Obsessive Compulsive tendencies” refers to obsessive compulsive characteristics that is milder than OCD observed in non-clinical subjects. A hypothetical model of OCD was presented based on the self-regulatory executive function model by Wells (1997) to examine the effects of metacognition on Obsessive Compulsive tendencies using cognitive attentional syndrome (CAS). In terms of metacognition levels, the variables were metacognitive beliefs and Thought-Action Fusion (TAF) and for CAS, the variables were worry, thought suppression and cognitive coping with intrusive thoughts. As a result, the hypothetical model was partially supported, and it was suggested that each of CAS variables has different functions in the metacognitive model.

**Key Words:** Obsessive Compulsive tendencies, metacognition, S-REF model, CAS